優秀賞（釧路人権擁護委員連合会長賞）

「恋愛観」

遠軽町立南中学校　三年　西野　悠妃

「なんか気持ち悪くない？」そう言われた時私は、心の中にずっと残るもやもやを感じた。私には小学校で知り合ったある女の子とすぐに意気投合し、何をするにも一緒だった。私はその子のことが大好きで、一緒にいるとものすごくうれしかったり、「好きな男の子がいる」と聞いたときは嫉妬したりした。後々これは恋愛感情なのかなと思った。

ある時、総合か何かの授業で同性愛について知った。だけどその子は、「女の子同士の恋愛ってさ、なんか気持ち悪くない？」「男の子が男の子を好きになって、女の子が女の子を好きになるなんておかしいよ」「私の近くにこんな人がいたら嫌だなぁ」と言った。それを聞いた私はショックを受け、「もし私が女の子を好きだってあの子にバレたら嫌われちゃうのかな」という恐怖で頭がいっぱいだった。

学校で普段通りその子と話していると、近くにいた男子が「お前ら同性愛者なんだろ！」「気持ちわりぃ～」と言っていきました。「私たちはそんなじゃないから！そう言うこと言うのやめてよね！」とその子が言ったとき、人のことを好きになるのは難しいと思った。

私はこの事を身近な大人に相談するのはなんだか嫌だったからチャイルドラインを使って大人に相談した。相談員さんに「自分が女の子に対して恋愛感情を抱いていること」「女子が女子を好きになることはおかしい事なのか」を相談した。途中、うまく伝えられなくて話も途切れ途切れだったけれど相談員さんは「うん、うん」と相槌を打ちながら最後まで私の話を聞いてくださった。話し終わった後、相談員さんは「それはおかしいことじゃないよ」「男の人は女の人を好きになる、女の人は男の人を好きになるって誰も決めたことじゃないよ」と言ってくださった。私はこの言葉を聞いて、「同性愛はおかしいことじゃない」ということに気づけた。

それから何か月か経った頃に、私はその子に「私は同性愛者かもしれない」と打ち明けた。その子はものすごく驚いていたが、「私ね、最近同性愛について調

べたりしてみたの。前は気持ち悪いとか思っていたけど、今は同性愛もいいものなんだなって思うようになったの。悠妃の思っていること気づけなくて、それで、ひどいこと言っちゃってごめん、、、」と話してくれた。私はその子のことが好きだということは言わなかったが、同性愛者かもしれないということを打ち明けてよかったなと思った。

　そのまま中学３年生になり、社会の授業で初めて「人権」について学んだ。そこで私はなぜ「男性と女性」は結婚できるのに、「女性と女性」・「男性と男性」は結婚ができないのだろうか、同性同士で結婚式などを行うことが可能でも、正式に配偶者として認めてもらえないのだろうかと思った。人権は、「社会を構成するすべての人が個人としての生存と自由を確保し、社会において幸福な生活を営むために、欠かすことのできない権利」と習った。幸福な生活の定義は人それぞれだと思うが私は日本では同性婚が認められていないため、本当に幸福な生活を営めているのかと思う。

　私は幸せになるために生まれてきたわけであって、人々に馬鹿にされて奇異の目で見られて辛い思いをするために生まれてきたわけではない。最近は社会問題として取り上げられ同性愛を知る人は増えたかもしれない。だが同性愛について理解することは、実際にその立場になって見ないと案外わからない。

　私はすべての人は自分らしく生きる権利があると思う。だから私は他人の意見・価値観に囚われず、自分らしく生きていく。そして私と同じような悩みを抱えている人の助けになりたい。